

ジークフリート・カヴェラウの「徹底的学校改革者同盟」論（Ⅰ）

船尾 日出志 訳

社会科教育講座（哲学）

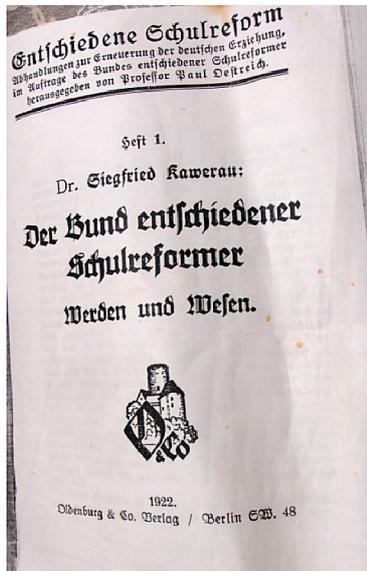
Siegfried Kawerau's Der Bund entschiedener Schulreformer.

Hideshi FUNAO

Department of Social Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

訳者から

ここではドイツ・ワイマル期の1919年の徹底的学校改革者同盟創設以来の幹部であり、同盟の代表的人物であったパウル・エストライヒ（Paul Oestreich, 1878-1959）の盟友であったジークフリート・カヴェラウ（1886-1936）が1922年に刊行した冊子『徹底的学校改革者同盟 成立と本質』【Siegfried Kawerau: Der Bund entschiedener Schulreformer. Werden und Wesen.



Oldenburg und Co. Verlag, Berlin 1922】を訳出する。同冊子はパウル・エストライヒによって編集され、徹底的学校改革者同盟に委託を受けたドイツ教育の改革のための『徹底的学校改革』叢書の第1号として刊行された。エストライヒが執筆者として同盟のなかで社会科＝歴史教育を専門としていた

カヴェラウを選んだのは当然のことと言えよう。

同冊子の構成は次のようになっている。当然、2～7の著者はカヴェラウである。

1. パウル・エストライヒによる添え書き
2. 時代
3. 徹底的学校改革者同盟の端緒（労働学校思想）
4. 闘争と成熟（体験学校思想）
5. 新しい精神の出現（生産学校思想）
6. 蓄積と創造（嵐の前）

7. 時代の渦の中で（現代）

比較的小さな冊子とはいえ、原文で60頁のボリュームのものであり、与えられた紙幅の関係で3報に分けて発表していく予定である（今回は1～3）。そして第3報に解題を載せることにする。

エストライヒもカヴェラウも、癖のある文章を書く。「もっと分かりやすく書けないのか」と思ってしまう。

なお本文中の《 》内は訳者による補足である。

1. エストライヒによる添え書き

歴史主義はわたしたちの関心にはない。むしろすべてはそれとは別である。しかし真実、自己批判、十分に計画的な行為を！そして生成させよ、確信させよ、燃え立たせよ、合理主義的＝神秘主義的活動性を！しかしそのような文化的軍勢を雇おうとする者は、清潔さや正確な文化的文書（証明書）を尊重しなければならない。その者が俗物だからではない。—永眠した「罪人」は、わたしたちにとって偽善的な卑屈者よりも好ましいに違いない！—良き文化的良心によってのみ永続的冒険を切り抜けることができるからである。しかし流木からは、それは暗闇のなかでまだそんなにも腐敗して、色づいて光っているかもしれないが、人間性の家を建てることはない！古くからの「プロイセン気質」は結局かろうじて、最初に「義務」がやってきて（「呪わしい義務」）、そしてそれからようやく私的人間性がやってくるといふ箴言として、賛美歌集のなかにあるということ、そのことはわたしたちにとって、正しく把握するならば、わたしは希望するが、ドイツ人の人間性の弾力ある骨格である。すなわち君自身と君の使命をひとつに融合せよ、君の職業上のユニフォームを横目でみながら生きるのではない！君の力を発揮し、君の本質、君なりの生活を、君が君の完璧さに近づくことができるように捉えよ！君の「義

務」は君の人間性である！ 生活は構成であり、克服であり、実行であり、服従、甘受、教条崇拜ではない！ 畏敬のため邪神崩壊を、そして愛によって世界を包み込み、全体にたいするイメージを持ちながらも、細々したことにおける、そして細々したことに関する無償の奉仕を。

わたしたちはこの団体《徹底的学校改革者同盟》のなかで闘いはじめてようやく3年である。以前に《第1次世界大戦の》最前線で5年間も勤務した者は、3年程度で何が大変なのか、と問うかもしれない。しかしわたしたちはいう。この3年間はその何倍にもなると。というのは何倍にもする悪魔が、かれらとわたしたちを圧迫したからだ。揺れ動きながら！ 疑心暗鬼、意気消沈、賛美歌風の時代、歯ざりするような覚悟、わたしたちはすべてを体験しなければならなかった。忠誠と裏切り、愛と卑劣さ、まがいもののレオニダス《古代スパルタの将軍、圧倒的多数のペルシャ軍を迎え撃ったテルモピレーの戦いで戦死【？～前480】》たちと真の英雄たちを。革命の海においてやがて酔ってしまうまで。そして—そんなに多くの、いろいろの素朴な信念の含蓄、それほど深い文化的憧れ、それらはわたしたちを再三、苦難の谷から救い出した！ わたしたちは生きる意味と人間の力、ドイツの価値と地球の尊厳を信じ、そしてしたがって文化＝政治家を、つまり真実性と行為への衝動と美への渴望に溢れたこちら側の人間をみつける！ そしてわたしたちはさらに奮闘しかつ前進したい。この愛、この渴望および信条のために。わたしたちはそうすべきである。というのは、わたしたちは厳しく自身に対してきたからである。この3年間はそのことを証明している。

ジークフリート・カヴェラウ、かれは全行程を共に進んできたのだが、ここで—というのは、わたしたちはそのことを必要としているので。今、わたしたちと一緒に歩むためにやってきて、そしてこれまでの道程を知らない多くの新しい友人皆のために、わたしたちの闘士たちのために、官公庁および外国にたいする証明として、敵および離反者による歴史偽造にたいする防衛として—「徹底的学校改革者同盟の歴史」として大急ぎで書きとめたことは、不備があるかもしれないし、個性によって濾過されているかもしれないが、客観性への意志は否定できず、そしてそのイメージは、わたしにはそう思えるのだが、良き編年史のスタイルのなかで明確となっている！ わたしならかなりのことを別の仕方で構成しそして評価するであろう。わたしには歴史の現象において、わたしたちの前進にとって将来、最終的に目標、未来、若者の活動への見方が最も重要であるように思えるかもしれない！ しかし、カヴェラウが書いていることは生き生きしており、個性的であり、真実であり、それゆえ良い！ わたしたちは常に自由を通して連帯性を志向してきた。この冊

子はその一つの証明であり、そしてそのための礎石である。石工自身が将来さらに形作っていくであろう礎石である。

わたしは、この同盟の編年史がわたしたちにとって、中傷の暗雲を吹き飛ばし、おしゃべりを止めるために手助けとなるであろう。今や、不正確に考えている敵はわたしたちについて学ぶことができる！

しかしこの冊子で欲せられていることが起ころうとも、わたしたちは意気盛んでいたいし、わたしたちは幸せにする同盟の行動方針をさらに追求したい。たとえそれが肩書きであるにせよ「プロイセン人」としてではなく、「社会主義者」としてではなく、促された人間として《「促された人間」：マタイによる福音書第14章の22に「その後イエスは自分の弟子たちを促して舟に乗り込ませた」とある》。小説『ヒューペリオン』のなかでヘルダーリンは正しい言葉を語っている。「しかしわたしたちが家を建てたところに、誰も住みたくないとき、それはわたしたちの責任およびわたしたちの損害ではない。わたしたちは、わたしたちのものであったものを実行した。わたしたちが耕した場所で、誰も採集したくないし、誰がわたしたちを悪く思うだろうか。その林檎が沼地に落ちたとき、誰が木に毒づくか。わたしは自分にしばしば言った。お前は消滅しつつあると。そしてわたしはわたしの日々の仕事を確かにやめた」。諦めでなく、かえって勇敢さのなかで。世界不安と世界思慕の緊張の場における意志世界を。

ベルリン＝フリーデナウ、1922年9月3日
パウル・エストライヒ

2. 時代

1918年11月の嵐《11月革命》のなかでドイツ帝国主義は崩壊した。

ドイツ帝国主義は、世界のすべての帝国主義と異なる固有性をもっていた。その固有性は、不平等な競争のなかで世界市場を奪取したか、あるいは奪取しようとした高度に発達した経済生活の表れであっただけでなく、最高年齢に至るまで酷く安い賃金でのサービス従事を強要する—なんとドイツの世帯の半数以上は1914年以前にはまだ年収900マルクすらもらっていなかった《900マルクは当時の日本円で200円ほどである。1896年に東京帝国大学の講師になった夏目漱石の年俸は800円であった》！—労働力の法外な搾取に根拠をもつ経済生活の表れであっただけでなく、ドイツ帝国主義はそれ以上にさらに別の特異な特徴をもっていた。すなわちそれは封建的＝中世的に仮装された、さまざまに傲慢な帝国主義であった。ヴィルヘルム二世は1895年に書いた。「わたしたちキリスト教の国王と皇帝にとって、『神の恩寵によって』という基本原則を維持するという聖なる義務が天によって課せられてい

る」。そして1905年には、「外国のわたしの代理人たちは、ただ一つの政策だけをおこなう。そしてそれはわたしの政策である」と書いている。そして皇帝の弟であるハインリッヒ親王は中国に行く。かれの言によれば、「外国での聖なる陛下の思いを守るために」。この封建的＝中世的不遜さは数世紀にもわたる長い活動のなかでプロイセン・ユンカー制によって養われ、ホーエンツォレルン家の「国父的」大ユンカー制によって強められた。ユンカー制は将校身分を生み出した。将校身分は私生児を持った。すなわち予備将校を。未婚の母は官僚制であった。そして助産婦はアカデミックなお下げ髪をした学問であった。高等学校教員と民衆学校教員は予備将校をむやみに渴望した。身分証明書、結婚式およびセダン祭《普仏戦争においてプロイセンの勝利を決定づけた戦いの祝典》はかくしてそれぞれの聖別式をもった。学校と大学は聖別式の掲げ香炉を揺らし、ホーエンツォレルン家讃歌を朗読した。ヴィルヘルム二世は学校を労働者階級にたいする闘いの道具にし、学校に「我が国の社会的・経済的諸関係の発展を、特に19世紀の初めから現在の社会政策的立法に至るまで提示する。…社会民主党の有害性について分からせることは、ここでは、社会主義理論のより詳細な説明に立ち入ることなしに、みだされている人間理性に基づいて実行されるべきである。社会主義的志向の不可能性は社会民主党の政治目標にそくして証明されるべきである」（1889年5月1日）ことを命じた。

そしてこの屈辱的なくびき《「紀元前321年、サムニウム人に破れたローマ軍は3本の槍で作られた「くびき」の下を丸腰で通過させられた」》の下を、忍耐力のある高校学校教師たちは通過した。大学の諸団体と大学教授の監督における破滅であった。

官僚の小さなグループだけがあのドイツ啓蒙時代の遺産を継承した。その啓蒙時代にはレッシング《Gotthold Ephraim Lessing, 1729-1781: ドイツ啓蒙主義の批評家・劇作家、終始自由な人間のために戦った。喜劇『ミンナ＝フォン＝バルンヘルム』、劇詩『賢者ナータン』、美学論文『ラオコーン』》は、宮廷による封建的束縛からの市民層解放のための突撃を行ったが、失敗し、その時代にかれはドイツ的家臣たちが着ているお仕着せの衣服を強く引っ張り脱がそうとしたが、成功しなかった。その種の若干の試みは、ウイヘルム・フォン・フンボルト《Wilhelm von Humboldt, 1767-1835: ドイツの言語学者で政治家》および、かれの友人たちを介して生き続け、パウロ教会のなかでもう一度、輝くように花咲き《パウロ教会で1848年の3月革命にともなって設置されたフランクフルト国民会議が開かれた。》、少なからずの市民層家庭のなかでその後、1860年代と1870年代に静かに養われた。

しかし今や、ビスマルクの時代がやってきた。そして後にビスマルクの仕事に疑念をもつこと、ドイ

ツ的問題のビスマルク的解決を最終的な、永遠性によって規定された帰結であると考えないことは、神への中傷であるとみなすことが始まった。マイネッケ《Friedrich Meinecke, 1862-1954: ドイツの歴史家》がかれの時代にあえて、相当な遠慮はしたにせよ、ビスマルク的解決の背後にひとつの疑問符をおいたとき、ドイツの多くの歴史家たちはどれほどいきりたったことか。そしてしかもそれは大学的内気さのなかで、ある歴史家会議のなかでみられた。先入観のない学問！ 自由な理論！ 1850年のプロイセンの押しつけられた憲法に書かれたなんと美しい言葉であることか。押しつけられた憲法—理論に立ち入ることなしに正当性を証明せよというヴィルヘルムの要求と類似する内的矛盾、自己の権利を行使することを厳格に禁じられているプロイセン官僚の憲法にたいする宣誓に類似する矛盾。いったい教師は保守派以外であってよかったのか。確かに国民自由党《北ドイツ連邦において1867年に結成された政党で、一貫してビスマルクの政策を支持》に属する教師の懲戒免職は例がなかった。教師は絶対主義的・臣民的以外に振る舞うことは許されたのか。官僚たちは、誰も聞き耳を立てていないところでだけ反対派であり、弱者にたいしてのみ、何よりも女性と子どもにたいしてのみ誇りを持ち、そして男性的であった。

しかしとはいえ、静けさのなかにあっても、あちらこちらで活動が起こった。そして1908年以来、ちょっとした騒ぎがあらゆる小さな会合で起こり続けた。1908年10月28日付の「デイリー・テレグラフ」紙におけるヴィルヘルム二世の自己顕示欲《イギリス陸軍大佐エドワード・ジェームス・スチュアート・ワートリーとヴィルヘルム二世のドイツの内政と外交について語った対談がイギリスの新聞『デイリー・テレグラフ』に掲載された。この対談でのヴィルヘルム二世の「侵略的な軽口」が国内外で問題視された。》はしかし効果のないままであった。年長世代は頭をふった《否定的な意思表示》。そして青年のなかに新しい精神が生き生きし始めた。

1896年にベルリン＝シュテグリッツにおいてワンダーフォーゲル運動が生じた。純粹＝知性的の中等学校にたいする反対、大都市からの逃避、純粹性と誠実性への、自然と人間性への憧れは推進力である。注目すべき速さで運動は拡大した。その運動を大人たちは理解できなかった。とはいえ青年のロマンとして好意的に黙認した。

その青年たちは成長した。政治的に不明確であったが、群れをなし、語り、そして書いた。内的に国家の機構にたいする、あらゆる生活発言の官憲による利用にたいする対抗のなかで。

その青年たちは自由ドイツ青年団として1913年に示威行動をした。公的なドイツがアルコールを飲み、

タバコを吸いながら1813-15年の戦争への追憶を、ライプチヒにおける諸国民会戦の記念碑除幕式によって行っていた一方で、その青年たちは高地マイセン《ライプチヒ東南東、ドレスデンの西北西に位置し、エルベ川沿いにある都市》に集合し、そして次のように誓った。「自己決定から、自己責任で、内的な誠実性によって生活を構成すること」。

世界戦争は大嵐として、その花咲く生活の上を通過した。最良の人々が戦争に巻き込まれた。そして青年は、自由ドイツ青年団もまた、かれらの血を祖国の防衛のために注いでいると信じた。政治的に不明確にケルナー《Theodor Körner, 1791-1813: ドイツの愛国詩人、対ナポレオン解放戦争に従軍して戦死、詩集『豎琴と剣』等》や1813年のリュッツオフの狙撃兵たちへの追憶のなかで、中世のさまざまな思い出（人としての信義、服従、軍事王）によって幻惑されて、犠牲や偉大なものへの帰依にたいする構えがあり、その青年たちはスエズからフィンランドまでの、フランドルからスイスまでの、パリの市域からクリミア半島までの塹壕のなかで消滅してしまった。最終的に、その錯乱状態はヴィルヘルムの封建独裁の破滅により崩れさった。しかし青年は死んでいたか、あるいは予備役将校気質によって虚弱であった。教師＝少尉は不平を持つ者として故郷に戻ってきて、かれは勲章を飾り付けて皇帝の誕生祭を希望した。今では肩章はもはや何の役にもたたなかったのに。結果として激しく失望することとなった。

学校と大学、去勢されかつ失望した青年たち、11月の嵐の中でさしあたり感覚を麻痺させられ、かつ啞然として、かれらはひたたくられ、かれらは組織され、かれらは新しい人民国家の敵となる。

まったく準備のない労働者の懐に権力がころがりこんできた。勤労者は崩壊のなかの唯一の支柱であった。崩壊にたいして、従順な官僚たちは、いかなる服務規程によっても指図されていなかったのであった。すべての文化問題にたいしてプロレタリアートは途方にくれた。プロレタリアートは、いつかは政治権力を握り、そしてその暁には文化問題をただちに自分で解決するであろうとされていた。従前、さまざまな物事は、とてつもなく遠い先のことでしかなかったのだ。

そのように従来は考えられてきた。目にされていることをそのまま文字にすれば次のようになる。資本家から笏《しゃく:王位、王権を象徴するもの》を奪い、そしてそれを高く掲げて振っているプロレタリアートの拳。そしてそこに突然、天国が、プロレタリア文化が、本来そうであるように出現した。それについてはいかなるイメージも作られていなかった。しかしそれは実行された。かくしてその光景はブルジョア文化の光景と絶望的に類似していた。今やまさにプロレタリアートの子どもたちが、エリート学校であるギムナジ

ウムに通い、大学に通い、そして裁判官あるいは高等学校教師になるであろう。

徹底的学校改革者同盟の端緒

(労働学校思想)

教育学的文献の紙の森のなかで1918年以来、とてつもなくすさまじい騒音がしている。しかし雷雲は来ておらず、稲妻は鈍く、憤りは次第に弱まっている。

そしてこの解かれぬさまざまな緊張の絶望的状况のなかで、ひとつの運動が始まる。その運動はさまざまな事柄の新しい秩序の興隆についての、すなわち新しい社会の到来についての直観をもち、そしてその社会の文化課題を認識し、把握し、形成することに努力する。

ばらばらであった何人かの高等学校教員が言語学者連盟のなかで、何も忘れずそして何も学ばない予備役＝高等学校教員の気質にたいする共同の敵対派へと結集する。不快な感じを与えるためには、わずかな自由主義で十分であるほど封建的に硬化してしまったフロンド党《フロンド党は17世紀フランスの政党で、転じて反政府党を意味する。ここでは「言語学者連盟」にたいする皮肉として使われている》にたいする（共同の敵対派へと）。さしあたっては、その大きな兵力《言語学者連盟のこと》は感覚を麻痺させ、混乱し、無規律である。したがってそこでは説得し、興奮させることができるならば、改革できるという淡い希望が出現している。労働者たちの分裂、新しい権力保持者の無知は旧権力のために余地を作っている。予備役＝高等学校教員たちは好機を感じとっている。そのような危機感のなかで仲間が集まる。すなわち、1919年の夏、「学士教員による徹底的学校改革者同盟」が成立する。1919年の秋の大会で提起された最初の宣言に署名した18人の男性と2名の女性の名前と性格を吟味するとき、価値判断を下すことは問題となりえない。しかしそのような指導的な人々を支えていたさまざまな勢力を明示することは試みられねばならない。

政治的経験において最も豊かなのは、運動の頂点に位置する男、ポメルン、コルベルク出身の家具屋の息子、パウル・エストライヒである。プロレタリア的環境のなかで成長し、家族の希望として中等学校に進学し、小都市の高等学校のさまざまな惨めさを、大学の大酒と忙しさ¹⁾を通り抜け、その後徐々に内面が変化し、強烈な現実感覚をもち、政治的にブルジョア左派で活動し、テオドル・バルトと親交を結んだ。すでに早くも、かれは反動派の憎悪を、官憲の父性的に阻む《余計な》お世話を経験し、すでに早くもかれはヴィルヘルム時代のさまざまな輝かしい嘘を見抜き、世界戦争による民族主義的醜態に惑わされなかった。我慢し、失望はしたが。プロレタリア的直観によって、か

れは時代の困窮を把握しているが、まだブルジョア自由主義的教条の束縛によって制御されていた。脇に離れて位置し、理解されず、心の中に燃えるものを持ち、自分自身を燃焼させつつではあったが。

エストライヒはすでに戦争のなかで、戦争中はすべての政治的な泉が官憲によって塞がれていたが、さまざまな経済学的・教育学的問題に目を向ける。特にディーデリッヒ《Eugen Diederich, 1867-1930, 1896年に自身の出版社を起業》の『行為』誌のなかで。若い女性たちの教育、陶冶の個別化がすでに1916年にかれの関心をひく。『行為』誌の同年6月号で、かれは選択自由の学校制度の構想を完全に自主的に展開した。しかしまだ、かれは「エリート」の選抜原理によって、時代の知性主義的な網によってとらわれている。かれ自身がそのかれの古い立場と徹底的に縁を切ったのは、かれの冊子『弾力的統一学校：生活学校と生産学校』²⁾においてであり、そしてそこにおいてかれは次のように語っている。「しかしわたしは、わたしがまだ1919年の大会においては主張し、そしてその大会の本『徹底的学校改革』がまだ反映していたような、この知性主義の優遇、一面的な才能にしたがう階層分け、知性主義的段階分けによる『指導者』育成への信頼をもちや擁護できない」。

それによって同時に運動の初期が、すなわち学士、大学卒業者にありがちな知性主義的な戸惑い（しかし大胆な言葉、無思慮な批判）が特徴づけられている。そしてこの否定的側面、すなわち懐疑、批判は少なからず次のような人々をさしあたり同盟の責務に従わせる。すなわち十分に公式の才能をもち、知性豊かでそして辛辣で、「勝ち馬」に賭けるといふ希望をもちつつ、しかし心からの信頼はなく、取り憑かれてはおらずそしてクールであるような人々を。並はずれて気むずかしく、そして他方では悲劇的に活動する指導者への共感、後にもはや共にできなくなる多種多様な感情的な《主観的な》人々を、当初は強力にこちらに来させる。

第2の潮流として同盟には「青年社会主義教員団」(Jungsoziale Lehrgemeinschaft) が加わる。

自由ドイツ青年団の諸勢力によって支えられて、それゆえ青年運動に依拠しつつ、11月革命を通じて一緒に渦を巻くように動かされていた無数のグループの一つが「青年社会主義学校綱領」を作る。プロイセン文部省内の考え方の近い勢力をあてにしつつ。ザールフェルトのヴィッケルスドルフにおける自由学校共同体の創始者であるヴィネケン《Gustav Wyneken, 1875～1964》が中等諸学校の生徒たち向けの命令を作成する時期のことである。唯一の真に革命的な省の命令であった。

その学校綱領の宣言の結論部分では、同綱領の非政治的な、純粹に教育的性格が強調されている。さら

に、いかなる職業組織も壊すつもりはないと説明されている。そして次のように若干不安げに採決されている。「学校組織、予備教育および給料にかかわるすべてのわたしたちの要求を、わたしたちは現実のさまざまな法権利要求を大切に扱うなかでの組織的發展の道筋において実現することを願っている」。その綱領ではさまざまな宣伝が試みられている。その綱領のなかに、あるヴィルメルスドルフの言語学者の諸要求が織り込まれ、民衆学校教師たちと類似した諸要求も織り込まれている。それによってこのツェーレンドルフ《このベルリン南西部地区はエストライヒの住居があり、この地名で徹底的学校改革者同盟が暗喩されている》の企ての意義が汲み尽くされている。

同盟員の最初のグループのなかの若干の人物たちは、その間にさまざまな公的機関において指導的地位をえて、そしてそれによって本来の同盟活動から疎遠になるか、あるいは完全に身を離した。次のことはまさに明確であった。そのような種類の言語学者たちに敵対しているつもりでいた文部省が、別のことを欲し、新しい国家を肯定する人々によって省内の若干のポストを埋めるために、さしあたってそれらの人物たちに目をつけたことは。パウル・エストライヒは重要な官職を厄介と考え、副次的な官職には応じなかったので、他のいくつかの小グループから人材が獲得された。徹底的学校改革者同盟を通して出世した学校関係者の少なからずの者にとっては、その後すぐに、かの「評判の悪い」グループ、つまりエストライヒの同盟への所属経歴は邪魔になった。そしてかれらは同盟との関係を解消し、それによって安心して、まさにそのようにして学校改革者でもありえたのである。

そのようにして革命のほぼ1年後、1919年の9月18日に、24人のメンバーからなる学士同盟が創設された。その際、プロイセンでは戦前にはおよそ21,000人の教師が中等男子学校、女子学校に在籍していた。

それらの勢力とともに、1919年秋の大規模な大会への招集に着手された。その大会は10月4日と5日にベルリンにある旧貴族院で開催された。

すでに言及されているその大会の記録文書は今日完全に時代遅れである『徹底的学校改革』³⁾である。とはいえ次の諸点をめぐっておこなわれた明確に手はずを整え尽くした大会ではあった。教授と教育、教員養成と教師の自由、教授における国家と社会、学校および生活理解。

その大会は同盟内部のみならず、外に向けてもまた久しく過去の逸話であり、確かな改革意志を表明した高等学校教員の逸話である。しかしその大会は当時、確かな学校政策的意義をもっていた。革命派の文部大臣、コンラート・ヘーニッシュ《Konrad Haenisch, 1876～1925, 第1次世界大戦以前からのドイツ社会民主党の学校政策主担者であったが、11月革命後プロイ

セン邦の文部大臣としては社会民主党的な政策を実行できなかった。》がその大会に登場した。久しく、アドルフ・ホフマン《Adolf Hoffmann, ヘーニッシュとともに文部大臣であった。社会民主党よりも左派の独立社会民主党に属していたことから分かるように、ヘーニッシュよりも改革への情熱は強かった。》とヴェネケンに病気のせいで仕事ができなくなっていた。ワイマル共和国における政権与党であったドイツ社会民主党がその社会主義的教育政策をほとんど放棄して、旧い学校官僚に妥協したいいわゆる学校妥協は、エストライヒとカヴェラウの激しい抵抗にもかかわらず、すでに仕上がっていた。エストライヒとカヴェラウは報道界において嵐のような批判を放ったが、効果はなかった。かれらは、両者ともにドイツ社会民主党に属しているのだが、党の「現実政策的」王笏で傷つくほど頭を打ちつけられた。エストライヒはすでにそれ以前に、ドイツ社会民主党教員労働組合の幹部から退いていた。カヴェラウは1919年の晩夏にはエストライヒに従った。両者とも、日常闘争における埋め合わせ対象としてしか扱われない文化政策を共にするわけにはいかないことを認識した。そしてそのようにして、あらゆる政党から独立して、大規模かつ決定的な文化政策を推進するという固い決心が生じたのである。その状況のなかでは—こちらには超党派的文化政策が—そちらには文化政策的政党政治が、こちらにはその日乗り越えることへの立場が、そちらには時代的な種類の立場、すなわち未来への、耐久性と時間を要することへの立場があった。そのような状況のなかに、エストライヒと共和国大臣《コンラート・ヘーニッシュ》の間のドラマティックな意見交換のための芽生えがあった。その論争は、「新教育」誌の第1巻に印刷され⁴⁾たが、その後、「前進」における紙上論争のなかで継承され⁵⁾そして今日も、確かなびりとした刺激を欠かない。その論争は時代の推進勢力にたいするエストライヒの予感的本能を教える。甲斐はなかったのだが、かれは大臣にかれの荒っぽく「コンラートよ、堅固になれ!」、「コンラートよ、指導者たれ! しかしわたしたちは惑わされないぞ!」と呼びかけた。

もっといえば、その大会は経済的・社会的認識にはまだほとんど触れることがない孤立した文化政策の表れであった。一部は懐疑的、一部は耽美的、一部は理性的、一部は感情不安定で、したがって敵対者たちの批判的指摘は、表面上は正しかった。しかし本質的にはさまざまな嘘が非難されるべきであった。というのはかれら《敵対者》には、なお躊躇しつつかつ抑制されてではあるが、こちら側で働くという文化意志への理解が欠落していることは明確であったからである。

当時の第2の記録文書はしばしば巷で言及される『学校改革白書』である。それはすでに品切れである。そしてその本は歴史家にとって価値豊かな資料であ

る。すなわち同盟の請願書と役所の回答である。そこでもまたカヴェラウの序文のなかに明確な文化立場がある。「すなわち、わたしたちにとって個人そのものは、まったくどうでもよいことである。すなわち、かれらがヘーニッシュであろうとハインリッヒ・シュルツ《Heinrich Schulz, 1872-1932, ヘーニッシュと同様に古くからのドイツ社会民主党の学校政策家であったが、ワイマル時代には、社会主義的教育政策を放棄した。》であろうと、かれらがトロット・ツー・ザルツ《ハインリッヒ・シュルツを揶揄した駄洒落:直訳すると「ノロノロと塩に向かう」》であろうとそのほかに何かであろうと。わたしたちにとっては、遂行された活動が重要であり、そしてその活動が目標へと導くかが重要である。その見地はわたしたちに至るところで極めて厳しい敵対性をもたらす。というのは、ドイツ人は次のことを信じ込まされているように思えるから。古ゲルマン的忠誠関係を新ドイツ的利益関係に変えろ」と。

1919年の8月から9月までの同盟の請願書においては何が問題となっているのか。中等学校のプロレタリア化が(予備学校の廃止に賛成、授業料に反対、偽善的な節約に反対、統一性に賛成、男女共学に賛成)。正当な現代的諸要求の綱領が省に提出される。—それらの実施は若干のエネルギーですむ要件である。すなわち例えば、合議制による学校指導、合議的選挙管理、保護者との親密な接触、試験の廃止、休みの平日の導入、上級学年の弾力化、ドイツ語教授と歴史教授の改革、教師たちの自己管理、モデル学校。それらのほとんどは何も起こっていない。しかしそれらは雑多な有用な事項の束である。とはいえ、それらは外からの改革しか意味しない。同盟は個別に地方で戦う仲間の面倒をみて、そしてかれらを援助しようとする。すなわち同盟は臣民的拘束の廃棄のために、教育者の人間的品位のために(点検、人事査定、素行調査というような仕方)に反対して、名誉職に就いた後見人による監督に反対して)闘い、同盟は教師と生徒の宗教的自由のために闘い、同盟は完全な政治的自由のために闘う。同盟は保護者評議会の創出において協力しようとしている—そしてこの点でプロイセン文部省は後に相当にエストライヒの定式化を使用するのである⁶⁾。

同盟のさまざまな会合(それらには多くの人が集まる)において、今日の教育制度の改革が「個々の個人の利害と共同体全体の利害の間の均衡を求める新しい人類の時代の精神のなかで」要求されている。会員資格の前提は自由な国民国家への、そして社会的な共同体の精神への決定的帰依である。身分的利害の代表は拒絶される。

新しい学校の目標とされているのは、国民共同体と人類の身体的に鍛錬されつくし、精神的に自由で、社会的に心情をもち、かつ意志強固な構成員への若人の

教育である。基礎になるのは、生徒と保護者と教師の教育共同体である。その体制は、弾力的上部構造をもつ個別化された統一学校としての、知的、作業技術＝活動的、かつ芸術的素質を等しく評価しかつ促進する労働学校であると考えられている。

その会議草稿のなかでは、知性主義からの離反（なるほど完全ではないが、とはいえ感じることができる）、学習学校（それには労働学校が対置される）への拒否が明白となっている。その労働学校の本質は、もちろんまだ、進歩的・自由主義的教育学の意味においては、それほど強く感じられない。

そのような思想は当時、頻繁に、特に『新教育』誌（それはさしあたって革命後のあらゆる改革的諸潮流の貯水池であった）において主張された。その雑誌は1919年1月1日以降、さしあたり月2度発行され、編集を担当したのはマルティン・ベーゲ博士《Martin Baege》であり、そして一時的に左翼のポーズをとる人々であった。「社会と教育」出版社が財政的にその背後にあった。同盟とは、その雑誌は、最初はまったく無関係であった。ことにその雑誌はすでにあの言語学者のミニグループの連合以前に実存していた。

そこではウィルヘルム国家によって苦しめられた教育者たち（例えばルードヴィヒ・グルリット《Ludwig Gurlitt》）が発言し、そこでは労働学校の伝統（ロベルト・ザイデル《Robert Seidel》）がものを言い、そこでは民衆学校教師の最良の改革意志（ハインリッヒ・シャルルマン《Heinrich Scharrelmann》）がものを言う。教育の社会化の問題に迫られ（R.ヴィルブランド《R. Wilbrandt》、オットー・リュウレ《Otto Rühle》）、すべての教会制度からの内的・組織的解放のために闘われている。フーゴ・ガウアー《Hugo Gauer》は青年協議の場のためにかれの大まかな計画を起草している。目次を紹介するだけでも、多数の思想をまさにおおよそにのみスケッチしようとするだけでも、やりきれないであろう。というのは、その雑誌は当初は、あふれ出る激流のようだったからである。そして多数の展望《雑誌や新聞の社説のようなもの》は、それらをベーゲ《Baege》博士が、かれの卓越した個人的知識のおかげで、よく確保することができたのだが、その時代の豊かさや乱雑さを反映している。左翼における乱雑さを照らしたのは、純粋に党派的に装われた社会民主党系の教師労働組合の支持者たちと社会主義の3陣営《社会民主党、独立社会民主党、共産党》すべてからメンバーを集めた社会主義教員組合の間のさまざまな闘争であった。

徐々に徹底的学校改革者同盟は「新教育」誌に浸透した。第8/9合併号（1919年4-5月）の冒頭を飾ったのはパウル・エストライヒの論説「同僚的学校体制」（kollegial Schulverfassung）であった。同盟の後の諸声明に、したがって10月会議の諸討議（「徹底的学校

改革」、44頁以降）および教師の自己管理のための構想に⁷⁾ 決定的に影響した。エストライヒは学校妥協をめぐる闘争に、かれの道を照らすような論文「中央党のための自由な道」⁸⁾ によって介入した。辛辣に、かれはあの中央党の大成功に光を当て、そのような破産をまだ勝利であると言い繕いたい政治屋どもに、すなわちハインリッヒ・シュルツヤリハルト・ローマン《Richard Lohmann, 1885—?》に決着をつけた。両親の権利をめぐる闘争を、かれは、自ら絶え間なく新たに方向付けしつつ、練り上げながら、ますますより以上の明確性へと案内した。かれはユートピアンたちのもとで自らを鍛えた。ユートピアンたちの著作を、かれはかれらの教育学的願望の特別な配慮のもとで刊行した《トマス・モアの『ユートピア』、トマス・カンパネラの『太陽の国』、ルイ・ブランの『労働の組織』、シャルル・フーリエの『ファランジェ』、ヴォルヘルム・ヴァイトリンクの『人間性』、カペーの『イカルスへの旅』を編集【『人類の記録』講座第2, 6, 10, 12, 15, 20号として】》。

学校改革者の小さなグループ《「徹底的学校改革者同盟」のこと》を著者とするいくつかの論説で全体が構成された号が1919年の秋の大会に向けて刊行された⁹⁾。しかしすでにそれ以前に、さまざまなメモが、その集団の活動に関する初期の情報をもたらした。初の声明として登場したのは学校妥協にたいするプロテストであった¹⁰⁾。それどころか、それよりもっと以前に言語学者連盟におけるそのグループの元気な報告がみつけれられる。ヴェルナー・ブロッホ《Werner Bloch》は1919年の5月号に書いている¹¹⁾。「改革を好む高等学校教師たちの小さな群れが固く結集し、そしてその連盟を動かすことに成功した」。その小さな群れとは、エストライヒおよびかれの友人たちであり、そしてその運動はもちろん存在し、活発であったし、とても活発であった。そしてその運動は、エストライヒおよびかれの親友たちが言語学者連盟から出ることで終了した。というのはその職業組織は、何か徹底的なことを欲する能力がないことが証明されたからであり、というのは引き続き留まることはエネルギーの浪費でしかなく、まさに純粋な文化意志の衰弱を意味することになるだろうし、その予備役＝高等学校教員の気質の有り様にたいする連帯責任を意味することになってしまったろうからである。今日、大波は次第に弱まってきており、当時の闘士たちはより広範な基盤を求めてきた。しかし、およそ250人の猛々しい高等学校教員と闘うことが何を意味するかを共に体験した者は、あらゆる労働者の集会は、それはまだ非常に激しくおこなわれているが、ドイツのいわゆる教養人の集会比よりも、より上品におこなわれることを知っている。そのような夕べの会、あるいはベルリン西地区での父母集会において体験されたことは、まさに高レベルの社会

的モラルではなかった。しかしその過程は経過せざるをえなかったし、言語学者たちは冒頭で特徴づけられたその有り様《「予備役＝高等学校教員の気質」, 「わずかな自由主義で十分であるほど封建的に硬化してしまったフロンダ党」》を証明せざるをえなかった。かくして徹底的学校改革者同盟によって職業組織にたよる道も、党にたよる道も放棄された。

そのように1919年のさまざまな出来事を概観すると、それらは十分に意義深い。なるほどまだ多くが古い精神のままである。例えば自由主義的な労働学校思想の実現のために「中等学校」を内から変革するには、学士として孤立して闘うべきである（とはいえ孤立した問題としては解決不能である）という信念のような。しかしかなりのことがすでに達成されている。何より政党や職業上の利害から自由な独立した前線部隊としての行為の自由が。それからさらに、人間をその全体性において、従来の知性主義から発達させようとする目標が。その問題は広がり始め、教育の問題はより包括的なパースペクティブのもとに入り込んでいる。プロレタリアートと新青年の力はその運動の見えざる担い手である。

原注

- 1) エストライヒがかれの青年期について伝えている回想を参照のこと。P. Oestreich: Straf- anstalt oder Lebensschule, herausgegeben von Paul Oestreich, verlegt bei G. Braun, Karlsruhe i.B. 1922, S. 146ff.
- 2) フランツ・ヒルカーによって編纂された『生活学校』誌の第4号として刊行された。
P. Oestreich: Die elastische Einheitsschule — Lebens- und Produktionsschule, Heft 4 der “Lebensschule”, herausgegeben von Franz Hilker, Verlag Schwetschke Sohn, 1921, S. 27.
- 3) Verlag Erich Reitz, 1920.
- 4) in: Neue Erziehung, 1919, S. 721–726 und in der “Entschiedenem Schulreform”, S. 1–9.
- 5) Abgedruckt im “Weißbuch der Schulreform”, Verlag Karl Curtius 1920, S. 6–14.
- 6) Vgl.: Weißbuch der Schulreform, S. 55ff.
- 7) Weißbuch ..., S. 30–32.
- 8) Juli – August 1919, Heft 15/16.
- 9) Heft 20 vom 1. Oktober.
- 10) Heft 15/16, Juli – August 1919.
- 11) Heft 10, S. 356

参考文献

船尾日出志『パウル・エストライヒ—徹底的学校改革者同盟の歴史教育・平和教育—』学文社, 1996年

(2012年9月14日受理)